



Title	「クッションから都市計画まで : ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟:ドイツ近代デザインの諸相」展
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 124-126
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53007">https://doi.org/10.18910/53007</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「クッションから都市計画まで——ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相——」展

Vom Sofakissen zum Städtebau — Hermann Muthesius und der Deutsche Werkbund: Modern Design in Deutschland 1900–1927

藪 亨／大阪芸術大学

ドイツ工作連盟の運動は、帝政ドイツ時代における設立から第一次大戦末までの草創期にはじまり、ヴァイマル共和国時代における発展と挫折の時期を経て、第二次大戦後の再出発から今日に至っている。本展覧会においては、こうした工作連盟の波瀾に富んだ歩みの中から、特に1900年から1927年にかけての動きに焦点が絞られている。設立への胎動がはじまる世紀転換期から1920年代後半におけるシュトゥットガルトの「住居」展までの、近代デザイン確立への動きに照明が当てられるのである。その展示構成は次の通りである。

プロローグ：19世紀の残照 ムテジウスと日本・イギリス（1887–1903年）

1. ムテジウスと日本（司法省と福音教会および新教神学校舎）
2. ムテジウスとイギリス（マッキントシュとベイリー・スコットそしてイギリス三部作）

I：ドイツ工作連盟設立への道（1904–1913年）

1. 第3回ドイツ工芸展（ドレスデン、1906年）
2. 工作連盟設立と年刊誌（Jahrbuch）の発刊

II：第1回ドイツ工作連盟展（ケルン展）と第一次世界大戦（1914–1919年）

1. ケルン展（1914年）と規格論争（Typenstreit）
2. ドイツ商品カタログ（Duetsches Warenbuch, 1916年）
3. ドイツ工作連盟海外展（バーゼル、ベルン、コペンハーゲンなど、1917–

18年）

III：第一次世界大戦後のドイツ工作連盟（1919–1926年）

1. 雑誌『フォルム（Die Form）』の刊行（1922年、1925年）

2. フォルム（Die Form）展（1924年）  
エピローグ：時代の転換（Zeitwende）

住居（Die Wohnung）展（シュトゥットガルト、1927年）

以上の展示構成からも明らかなように、本展覧会は、「20世紀初頭における近代デザインの動向を、ドイツ工作連盟の活動を中心に、バウハウスを金字塔とする従来の近代デザイン史の文脈から回顧するのではなく、ムテジウスの言説から再構築すること」を目的として企画され、京都を皮切りに東京にも巡回している。京都展は京都国立近代美術館で2002年11月2日から12月23日にまでで、東京展は東京国立近代美術館で2003年1月18日から3月9日まで、それぞれ展覧されている。

本展が掲げる基本テーマ「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟」がモダン・デザイン史の最重要事項のひとつとして特定されるのは、デザイン史の古典とも称されるニコラス・ペヴスナーの名著『モダン・デザイン』の先駆者たち』においてであった。早くも1930年代の中葉にその初版が刊行された当書では、19世紀最後の四半世紀から20世紀初めにかけて活躍した近代運動の先覚者たちについて、彼らの機能主義的なデザイン思考やその実践活動に照明が当てられたのである。ことにムテジウスは、「1890年代のイギリス様式とドイツの連結リンク」としての役割を果

たし、さらに「ザッハリヒカイトに向かう新しい方向の原動力」としてドイツ工作連盟の出現を先導したことが高く評価されている。

こうしたムテジウスによるイギリスのデザイン文化の導入は、本展の「プロローグ」部門において取り上げられている。しかもこのプロローグ部門では、ムテジウスが建築家としての修業時代に日本にエンデ&ベックマン事務所の建築アシスタントとして滞在し、司法省の建築の仕事に携わり、さらにはドイツ福音教会や新教神学校舎などの建築設計を手掛けたことをも取り上げている。ムテジウスの日本滞在については言及されることはあってもその詳細が不明であった。ところが本展においては、ドイツと日本に残されている関係史料が一堂に会することによって、その全貌が明らかにされている。本展のすぐれた特色のひとつをここに見いだすことができよう。

とところで1907年秋にミュンヘンで結成されたドイツ工作連盟は、「芸術家、実業家そして専門知識人」からなる専門家団体であり、質の良い仕事を願い遂行できる者、また全体文化の活動の一部として実業活動を見なす者、こうしたすべての人々の中心点となることが目指された。彼らが考えた「質」とは、「優れた堅牢な仕事と欠点のない真正な材料の使用のみならず、これらによってザッハリッヒで品位があり、お望みならば芸術的でもあるように有機的に全体をデザインすること」であった。彼らは、こうした「質の思想」を掲げ、健全で調和のとれた新しい文化創造を目指した。そして、この全体目標の設定に当たって、他に先立って何よりもまず意識された専門領域は、いわゆる産業美術（Kunstgewerbe）であったのである。本展においても、家具、陶器、金工、ガラス、染織、壁紙などの当代における産業美術品のかずかずが展示され、そこを訪れるひとびとの目をひき付け

ている。

そもそもドイツ工作連盟は、19世紀中葉に始まるドイツの「産業美術運動（Kunstgewerbebewegung）」を汲んでいた。この運動の中心は、1867年に組織された「ベルリン産業美術博物館」であり、奇しくも今日ベルリンの工作連盟資料館がその2階に入室している建物「マルティーン・グロピウス・バウ」は、1881年に建てられたその新館であった。またこの産業美術運動の先導者ゴットフリート・ゼンパー（1803-1879）は、芸術作品の生成に注目して、そのフォルム自体の観察よりも、そのフォルムを生み出す基本条件としての「理念、力、素材、手段」の解明に取り組んでいる。そして、人間の目的に役立つものを美しく装い、あるいは意味あるものに形作ろうとするような、そうした美化や理想化の動機づけから起こったのが産業美術であるとしている。ここにゼンパーが示めた試論、すなわち生活領域をとり囲む素朴な産業美術品に芸術の萌芽と原型を求めるという考え方は、その後のドイツにおけるデザイン理論の構築にとってすぐれた指針となっていたのであり、ムテジウスと工作連盟もその例外ではなかった。またこうした「人」よりも具体的な「物」にこだわる姿勢は、工作連盟設立当初の「製品の質の追求」にも受け継がれており、今日の工作連盟資料館のもうひとつの名称「物のミュージアム」にも反映させられている。

これに関連して本展で注目されるのは、工作連盟がデューラー連盟と共同制作した「ドイツ商品カタログ」の関連史料の展示である。良質の商品の流通を目指して1913年に着手され1915年に刊行されたこの「ドイツ商品カタログ」は、精選されたさまざまな家庭用品を提示することで消費者教育に務めており、まさに「グッドデザイン」運動の先駆のひとつ

であったのである。

また本展の展示内容は、展覧会名「クッションから都市計画まで」にもうかがえるように、きわめて多彩で多面的である。会場には、産業製品、建築モデル、図面、建築写真、展覧会ポスター、書籍、文書など約250点が、先述の五つの展示構成で展観されている。したがってここには、建築デザイン、インテリア・デザイン、インダストリアル・デザイン、グラフィック・デザインから産業美術デザインやクラフト・デザインにいたる多様な歴史研究の対象が勢ぞろいしている。本展のもうひとつの柱は、工作連盟運動に関連するデザイン物品とその多彩なイメージであったといえよう。